



Happy Birthday



gajile

高山莉子(タカヤマリコ)17歳、高2

趣味*創作

特技*剣道

あだ名*リコ __

中野秋也(ナカノシュウヤ)18歳、高3

趣味*ゲーム

特技*ナシ

莉子の隣の住人であり幼馴染み

あだ名*シュウ __

「先輩にフラれた」

某日、莉子は秋也のベッドの上で呟いた。

「唐突やな」

秋也はゲームから目を離さずベッドに背もたれている。

「うん。今日告ってんかあ。もうウチの事する時も輝いてたわ」

「何やねんそれ」

苦笑まじりに相づちを打つ。

「もーウチん中ではいつでも先輩ちょー輝いてたよー」

「めっちゃ思い出やな」

「当たり前やん。フラれたんやし」

しばらく沈黙が流れる。

綺麗に整頓された部屋にヒーターの熱を出す音と秋也のゲームから洩れる音しか響かない。

莉子は秋也の対応に不満を持ち、彼のゲームを取り上げた。

「うおっ、ちょ、何すんねん!!」

「なあ、ちゃんと聞ってる??」

「聞いとるわ!!ナメんな!!つかセーブしろっ!!死んでまうやろ」

異常な秋也の焦り様に莉子は彼に向かってポイツとそれを投げた。

「投げんなボケェツ!!」

「ボケはアンタやアホカスウ」

「何やとやんのか、ああ!?...ツ...」

ゲーム機をキャッチして勢いよく莉子を見た秋也は彼女を見て押し黙った。

「...ボケは、あんたや...」

「お前...」

莉子は目に涙を溜め、強く睨んでいた。

「ウチふられたんやで??ちょっとはハナシ聞いたらどやねんな」

「聞いとるやろって泣くなッ...」

「泣いてへんわアホォ」

莉子はベッドから降り、秋也に背を向けて言った。

「トイレかりる」

そして出ていこうとする莉子を秋也はすんでの所で彼女の腕を掴んだ。

「待てや」

彼は床にゲームを置き、立ち上がる。

沈黙。

「...莉子が俺の前で泣くん久しぶりちゃう??」

「...」

「フラれたん初めてやねんろ??」

「...」

何を言っても反応がないので、秋也は莉子の腕を引いて抱き寄せた。

「泣けばええやろ。無理すんな」

「...うっさい...っふ...うう...」

ずっと憧れやった

「ウチな、あの人が剣道してるトコ見て部活入ってん」

「え、まじで。知らなかった」

莉子が落ち着いた後、二人でベッドに腰かけ、秋也は気まずくならないようにとBGMにCDをかけた。

「あの背中が、憧れやった。あの人がおったから、剣道がもっと好きになった」

「つかさ、何年越しの恋??」

「忘れても一た」

苦笑して天井をあおぐ莉子。

「秋が先輩とつるみはじめた時ちゃう」

その答えに秋也は呆れる。

「めっちゃ前やん」

「呆れんといてよ」

静かに音楽が流れる。

「なあ莉子」

「なに??」

「失恋して、辛かった??」

莉子は驚きの目を彼に向け、微笑んだ。

「んーん。さっき秋がいてくれたから、まだちょいマシ」

「そーか」

「...」

「...」

二人がこんなにも沈黙に包まれるのは珍しい。

「...うちな、もしかしたら、ただの憧れだけやったんかなあて、今おもてんねん」

「俺が羨ましかったんもあるんちゃう??」

莉子の言う先輩と秋は、いわゆる悪友だ。

「そうかも。てゆーかウチ、これから秋と一緒にあったら先輩と会ってまうやん」

「ホンマやなあ」

また沈黙が訪れる。

今度、口を開いたのは、秋也だった。

「なあ」

「んー??」

「おれ、さ、」

「??」

秋也は莉子を覗きこんで、真剣な目を向けた。

「つけこんでいい??」

その言葉に首をかしげる。

「何に??」

「好きやねん、莉子」

「...しゅ、う...」

「俺」

「ジョーダンやめてよ」

莉子は笑いとばすことで秋也の言葉を遮る。

「冗談ちゃうわ!!」

ビクリ、と肩を震わす。

真剣な声。

真剣な、瞳。

「莉子。俺は、莉子のこと、好きやねん」

秋也に駆け寄って、無邪気に聞いた。

『なあ秋』

『なに??』

『あの人誰やったん??』

秋也から離れて行く後ろ姿を指差す莉子に彼は後頭部を搔いて教えた。

「俺のダチ。やしお前のイッコ上や」

「へえっ!!ほな、せんぱい、やなッ!!」

その目は、恋をする目だった。

嘘やろ...

想い続けて、何年たつだろうか...

今その小さかった生意気な女は俺の前で、目をかっぴらいている。

想いは、勝手に

口から出た。

「...ウチの事が...??」

確かめる彼女に、俺は軽く頷いた。

「ずっと、ずうっと前から、好きやってん。なあ、...付きおうてくれるか...??」

「ごめんな、つけこむなんて汚いマネして」

彼女の耳元で囁く。

「ううん、ウチも秋に酷いことしてた。それにな、秋が今さっき言ってくれた時、思い出してん」

莉子を優しく包み込む。

「何を??」

「ウチもな、秋の事、好きやったって...」

驚いて体を離して彼女を見る。

「ウチ、秋への想い気付いてんやけどケド、秋、ソン時、彼女おってん」

断ち切るために、自分に、思い込ませた。

自分は先輩の事が好きだ。

「お前なあ」

健気で愛しくて、思わずまた抱きしめた。

「秋、ウチ、秋のこと好き」

「俺も」

こうやって、愛を確かめる。

やっと、手に入れた。

二人で壁にもたれる。

「あ、秋の時計って正確??」

「うん、どうしたん??」

莉子は少し頬を染めて、呟いた。

「...ちょっきし、れいじや...」

「...、ああ...」

俺は微笑み、目をうすめ

唇を、近付けた。

「HappyBirthday...莉子」